



独立行政法人 労働政策研究・研修機構
主任研究員

下村英雄

キャリア教育の新たな課題

—今後あらためて問われるもの—

休校になった娘はタブレットで動画を見ながら塾の算数の授業を受けている。ママは扉一枚を隔てた隣の部屋でパソコンに向かってウェブ会議に参加している。パパは次々と会議が中止になり、メールやらチャットやらいろいろなアプリを使って誰かとやりとりをしている——

新型コロナウイルスによる大混乱のなか、多くの人が、自宅で、パソコンの画面を通じて世の中とつながった。パソコンを閉じれば数秒で家庭に戻る光景は、新しいようで、職住が接近した昔の働き方にむしろ近い。店をやっている家は壁一枚を挟んだところが仕事の間であり、生活の間だった。家に作業場を持つ職人の働き方も同じだ。我々は、新型コロナウイルスの拡大に脅え、その猛威に抗いながら、仕事の間と生活の間が密着する働き方をあらためて発見する形となった。

古今東西、キャリア教育の一つの理想は、ともすればバラバラになりやすい「働くこと」「学ぶこと」「生きること」の間隙を可能な限り埋めることだ。だから、学ぶことを主とする学校では、働くことを混ぜ合わせようと職場体験や職場見学を行う。既に働いている社会人にはリカレントに学び続けることを推奨する。もちろん、よく学び、よく働くのは、より良く生きるためだ。これらがバラバラになる時、人は生きる意味を見失い、心身に失調を来す。

今回、期せずして「働くこと」「学ぶこと」「生きること」が重なり合う時間を体験して、自らの仕事やキャリアの意味を深く考え直した人は多いだろう。それは、本来的なキャリアのあり方にわずかに触れた瞬間でもあったのだ。

一方、このコロナ禍によって新たなキャリア教育の課題も浮かび上がった。

第一に、ITスキルの問題だ。幼い頃から情報機器に囲まれて育った今の子供達はツールを使いこなすこと自体に心配はない。重要なのは、抽象的な情報やデータをもとに具体的な物事を作り上げる力だ。情報機器で電子的に形作られた様々な文字列やデータから具体的な形をありありと想像し、インターネット上のコミュニケーションで物事を話し合い、決断し、次なる行動に向かっていく。このプロセスは、いわゆるモノづくりとはだいぶ異なる。仕事がどんどん抽象的で、バーチャルなもの、手にとって触れないものになるなか、抽象と具象を往還する働き方を、キャリア教育ではいかに取り上げ得るだろうか。

第二に、いっそう難しい問題は、あらためて具体的な形あるものをどう考えるかだ。どれほどオンラインで物事が進もうと、ラストワンマイル、体に密着するもの、形を必要とするものはなくなる。例えば、子供は完全にオンラインで学ぶことができるだろう

か。仮にできたとして、人との接し方や人間関係はどのように学ぶのか。その先の愛着的なもの、性的なもの、家族的なものは、オンラインでどう実現するのか。最後まで具体的な形あるものとして残るのは、人間関係、特に親密な他者や家族であろう。キャリア形成と家族形成の問題は常に表裏一体の関係にある。今後、親密な人間関係はどのように結び、人のキャリアに影響を与えるのか。

第三に、これまでの話には、オンラインの働き方を容易に実現できる層と実現できない層の格差の問題も見え隠れする。海外の文献は特にインフラの問題を重視する。パソコン、スマホなどの情報機器、Wi-Fiなどの通信環境、自宅で仕事ができる部屋・場所のいずれも費用がかかる。家庭環境に伴う情報インフラの不均衡を、どの程度までキャリア教育の枠内で考えるべきか。学校で一律にタブレットを配り、ウェブ会議のシステムで話し合いをさせればよいのか。情報格差をキャリア教育で補うとはそういうことなのか。

キャリア教育は、一般に思われている以上に、世の中の動向を敏感に感じながら、その形を少しずつ変えていく。この社会的な大混乱によって、我々は何を経験したのか。それはキャリア教育にどう影響を与えるのか。キャリア教育に関心をもち大勢の人と引き続き議論していく必要があるだろう。